

## 現代日本語の談話に於ける 変音現象についての研究

金 東 完

日語日文學科

(Received September 23, 1987)

### 〈要 約〉

一般に、日常の言語生活の中で人間が表出する種々の思想や感情の伝達手段として、大きく「書き言葉」と「話し言葉」があげられる。本稿では、現代日本語の話し言葉の中で、普段、日本人が自由に表現している談話の種々の変音現象に着目し、それを分析したのである。つまり、現代の日本映画四本を資料にとり、インフォーマルな表現をそれぞれの類似点により類型化した後、音節の縮約・脱落・添加などの行われる音声的・心理的背景を吟味することにより、変音現象の実態を明らかにしたのである。

---

## 現代日本語의 談話에 있어서의 變音現象에 관한 研究

金 東 完

日語日文學科

(1987. 9. 23 접수)

### 〈要 約〉

一般的으로 日常의 言語生活 가운데에서 人間이 表出하는 여러가지 思想이나 感情의 傳達手段으로서는 크게 「書き言葉」와 「話し言葉」를 들 수가 있다. 本稿에서는 「話し言葉」가운데에서도 보통 日本人이 自由롭게 表現하고 있는 談話의 여러가지 變音現象에 着眼하여 그것을 分析한 것이다. 즉, 現代日本映畫 4編을 資料로 擇하여, informal한 表現을 각각의 類似點에 의해 類型化한 다음, 音節의 縮約・脱落・添加 등이 이루어지는 音聲的・心理的 背景을 吟味함으로써 變音現象의 實態를 밝히려 한 것이다.

---

## I. 序 論

### 1. 研究の目的と範圍

一般に、日常の言語生活の中で人間が表出する種々の思想や感情の伝達手段として大きく「書き言葉」と「話し言葉」があげられるが、本稿では、「話し言葉」<sup>1)</sup>に於いても二つの表出仕方があ

1) 一概に、「話し言葉」と言うものの、それには会議、講演、報告、儀式、討議、談話などが含まれていると言えよう。但し、報告に於ける「話し言葉」の観察はその対象として主に「談話」を設定することにした。

るという前提から始めたい。即ち、「定型的表現」と「非定型的表現」、又は、「改まった表現」と「くだけた表現」、或は「フォーマル(formal)な表現」と「インフォーマル(informal)な表現」とがそれである。

実際に、日本人が普段、表出している話し言葉を注意しながら観察して見ると、そこにはいろいろの場面に於いてくだけた表現がよく現れているのに気づく。例えば、人の家を訪問した後、離れる時の「お時間をとってしましまして」という挨拶言葉が「お時間をとっちゃいまして」になるとか、八百屋などで主人がお客にものを勧める時の話で「こんなものではどうですか」が「こんなんで、どうです」になる場合はそれほどめずらしくもないことであろう。又、「どこへ行ってたの」で「い」が脱落したり、「そう(で)すねえ」で括弧の「で」が弱く発音されることも実際の話し言葉に於いてまま聞く通りである。して見ると、一般に日常の話し言葉は、乱れ・くずれが多いと言われているが<sup>2)</sup>、まったくその通りであると言える。

我々は日常の言語生活を営むなかで、できるだけ多くの情報を短い時間と労力で果たそうとしている。いわゆる情報化社会とまで言われているのである。すると、より多くの情報量をより制約されている場面で表出し切るには、改まった表現の仕方ではうまくできないのであろうし、又、親しい間柄ではむしろくだけた表現がいつそう安定していると言える。

ところで、問題はこのような乱れ・くずれの多い表現が日常の言語生活ではよく使われているにもかかわらず、いまだにこのような点に対する研究はあまりにも行なわれて来なかった点にあるのではないだろうか。戦前までは話し言葉についての研究がそれほど進まなかったが、前後から「言語生活」という新しい研究テーマと共に「話し言葉」についての研究も活発になってきたことは事実である<sup>3)</sup>。しかし、これまでの「話し言葉」に対する研究は主に談話、討議、会議、講義、報告や儀式などに於ける文の構造やその類型、表現意図、それから指導方法などについては盛んであるが、具体的な音声上の変化に対する研究はほとんど行なわれなかったと言っても過言ではないだろう。

従って、本稿では実際の日常の言語生活で行なわれる話し言葉に於けるいろいろの音声上の変化に注目し、それらの現状を明らかにする一方、それらの音声上の変化に於けるいろいろのルールらしいものを求めることにその目的がある。なお、その研究範囲は日常の言語生活で普段使われている話し言葉、即ち、会議や講演、それから報告や儀式などに於ける音声上の緊張感を排除した談話だけに絞りたいと思う。なぜかと言うと、やはり話し言葉に於けるいろいろの音声上の変化は、同じ話し言葉と言っても、一般に乱れ・くずれの多い日常の談話で一番盛んに現れると思われるからである。

つまり、以上の目的と範囲をもって談話に於ける音声上のいろいろの変化を明らかにすることにより、話し言葉の属性がもっと詳しくされることを期待するのである。

## 2. 研究の資料と方法

一日に同じ話し言葉と言っても、種々のものがあり、日常談話、会議……などがあるのは先にも述べた通りである。しかるに、これらの中で本稿のテーマである音声上の変化が一番盛んに現れるのはやはり日常談話であろう。

本稿では、日常の談話に於ける音声上のいろいろの変化を研究するに於いて、現代の日本の映画四本をその観察資料として用いることにする。これを選んだ理由は、映画には様々の場面に基づく乱れ・くずれの多い表現がいくらかでも出てくるし、又、性別、年齢、社会身分、親密度などによる表現方法の差と共にそれらに伴われる音声上の変化が豊かに現れているであろうと判断したからである。

資料としては、日本のNHKが製作した一時間上映の映画、「三年たって、恋」、「ちょっといい夫婦」、「わが美わしの女」、「母上様、赤沢良雄」からの台詞を用いることにする。したがって、

2) 大石初太郎、「話し言葉とは何か」(「話し言葉」所収)、p. 37、文化庁、1981。

3) 松村 明、「話し言葉の世界」、p. 2-3、教育出版、1979。

水谷 修、「話し言葉の表現」、p. 11-13、筑摩書房、1983。

国広哲彌、「日本人の言語行動と非言語行動」(「日本語」所収)、p. 3、岩波書店、1977。

先ず、これら四本の映画の台詞から本稿のテーマである音声上の変化を全部抜き出し、それぞれの性質により下位分類を行なうことにする。その次に、分類された各項目別に用例を提示しながら記述していくが、ついには何らかのルールみたいなものを求めたいと思う。つまり、こうすることにより、日常談話に於ける音声変化の体系づけがある程度、整えられることを狙うのである。

## II. 本 論

### 1. 談話と変音現象

まず、談話とは何を言うのか、から始めなければならないだろうが、具体的にどのようなものを「談話」と認めるかは、相当難しい問題である。それは学界に於いても、「談話」の概念定義についてはいろいろがあるなど、まだ定説らしいものが見当たらない現状からも言えるようであるが、本稿では、「談話」を、自由な日常会話を指すものと想定して置きたい。即ち、同じ話し言葉と言っても、講演、講義、演説などとは異なり、音声上の緊張感や複雑な構文によることなく、ごく少数の話手と聞き手との間で、自由に行なわれるものを指すのである。

同じ話し言葉と言っても、やはり音声上の変化は講演、会議などより談話に於いて一番盛んに現れるが、これは談話には格式張った雰囲気よりはくだけた雰囲気に裏づけられているからであらう・又、それこはできるだけ短い時間と発言でより多くの情報や感情を表出したいという心理的背景に負うところも少なからずあるだろう。

実際、「あしたになれば行かなくてはならない」よりは「あしたんなりや、行かなくちゃならん」の方がずっと省力的・経済的発言になるのは言をまたないことであろう。

ところで、このような談話に於ける音声上の変化を、本稿では「変音」という用語で表わしたいと思うが、要するに、音声上のすべての変化を指すものと今しばらく大まかに規程して置く。こういう種々の変音についての研究は、現実の話し言葉、特に談話の生理を明らかにするには不可欠のものと思われるが、秋永一枝氏は<sup>4)</sup>このような談話に於ける変音について、日本人は普段変化した形で発音していると指適した後、この変音を「東京語のなまり」と規定している。現在の日本語に於ける標準語は、東京語をそのモデルにしているから、より美しく正しい標準語を指向するためにでも、このような変音の実態を明らかにする一方、そのルールらしいものをまとめ、談話と変音関係を定立して置く必要があると思われる<sup>5)</sup>。

### 2. 変音の類型化と下位分類

本論を進めていくに於ける次の手続きとして、談話の変音をそれぞれの類似点により類型化し、その下位分類を試みることにする。先ず、次の変音現状に注目したい。

- A. でも来年もう、七回忌が来んのよ。(三年)<sup>6)</sup>  
 B. さ、そいじゃ、行ってみるか。(夫婦)<sup>7)</sup>  
 C. あんなもの買ってやるからいけねえんだよ。(友)<sup>8)</sup>  
 D. いやあ、本当によく来てくだった。(友)  
 E. こいつあちょっと深刻なんでね。(夫婦)  
 F. これから、おじいさんは、どっかへ。(友)

4) 秋永一枝、「言語行動に於ける音声」(「言語行動と日本語教育」所収)、p. 128-130.、凡人社、1985.

5) 談話の変音をテーマにした著作物は少ないが、次の二つのものがある。

土枝 哲、「教養番組に現れた縮約形」(「日本語教育」28号 所収)、1975.

大坪一夫、「縮約形」(「日本語教育事典」所収) p. 51-52. 大修館書店、1982.

6) 映画「三年たって、愛」を指す。

7) 映画「ちょっといい夫婦」を指す。

8) 映画「わが美わしの友」を指す。

上の例Aは、「る」が「ン」に、Bは、「れ」が「イ」に、Cは「ない」が「ネエ」に、Dは、「さ」が「ス」に、Eは、「は」が「ア」に、それからFは、「こ」が「ッ」にそれぞれ変じている。このように音が変わるのは実際の談話で、できるだけ発音しやすくしたいという心理から生ずるものと思われる。本稿では一応、これに「音便」という用語を当てることにはしたい。つまり、音便は次のように分類されるのである。

音便	{	「ン」音便(「る」などが「ン」に)
		「イ」音便(「れ」などが「イ」に)
		「ネエ」音便(「ない」などが「ネエ」に)
		「ス」音便(「さ」が「ス」に)
		「ア」音便(「は」が「ア」に)
		「ッ」音便(「こ」が「ッ」に)

又、次の用例を調べて見よう。

- A. あきらめなくちやいけない。(三年)
- B. ちょっと切らしちまいまして。(夫婦)
- C. え、よく言ときますですよ。(友)
- D. ビョコッと生き残ったりしたひにや。(母上様)<sup>9)</sup>
- E. きょうでなきやだめだってとこがさ。(友)
- F. さあ、今日はこないだの敵討ち。(三年)
- G. その生に未練がないちゅうところが、一番いい。(友)

上の例の下線のところは、それぞれ「～ては」が「～チャ」に、「～てしまう」が「～チマウ」に、「～ておく」が「～トク」に、「～には」が「～ニヤ」に、「～なければ」が「～ナキヤ」に、それから「このあいだ」が「コナイダ」に、「～という」が「～チュウ」に変わっている。これらもやはりできるだけ発音をより短かくしようという心理的背景から出てくるものと思われるが、前の音便とは違い、音節の数が少なくなっている点で、一応、「約音」という用語で区別したいと思う。つまり、音便の場合は、実際の音は変じていてもその音節の数はそのままであるが、「約音」の場合は、実際の音も変じているばかりでなく、又、その音節の数も少なくなっているという差があるのである。これをまとめると、次のようである。

約音	{	～テハが～チャに
		～テシマウが～チマウ(チャウ)に
		～テオクが～トクに
		～ニハが～ニヤに
		～トイウが～チュウに

次は、実際の発音に於いて音が脱落する場合であるが、先ず、次の例を参照してみることにする。

- A. でも、それは、あなたの判断でしょ $\phi$ <sup>10)</sup>。(三年)
- B. それ焼いて、ね、一杯飲んで $\phi$ て。(夫婦)
- C. ま、そんなとこ $\phi$ だね。(友)
- D. うち買うと、男は白髪がふえ $\phi$ んだってさ。(母上様)
- E. お前のことを言って $\phi$ んじゃないよ。(夫婦)
- F. そうなん $\phi$ すよ。(夫婦)

上の例を見てわかる通り、Aは意志、推量を表わす助動詞「う」が、Bは他動詞と結合して状態を表わす「～ている」から「い」がそれぞれ脱落している。又、Cの場合は、程度・状態などを表わす形式名詞「ところ」から「ろ」が、Dは動詞「ふえる」の「る」が脱落しているし、それからEは、動詞「いる」が、Fは助動詞「です」から「で」が脱落している。本稿では、これらを「脱音」と名づけて

9) 映画「母上様・赤沢良雄」を指す。

10) 記号「 $\phi$ 」は、音節の脱落を指すことにする。

置きたいが、この脱音をまとめると次のようになる。

脱音	「ウ」の脱落
	「イ」の脱落
	「ロ」の脱落
	「ル」の脱落
	「イル」の脱落
	「テ」の脱落

ところで、この脱音もやはり約音の場合と同じく音節の数は少なくなっているのです。この二つの変音を合わせて「縮約」と呼んで置くことにする。つまり、「縮約」という変音現状には、またその下位分類として「約音」と「脱音」に分けられる訳であるが、前者は語句が縮み、後者は音節が完全になくなってしまふという点で見分けられるのである。

それから、次の類型化として母音の長音化が上げられる。

- A. あなたあ、パン焼けたわよ。あなたあ。(夫婦)
- B. ようく食べるでしょ、父さん。(友)
- C. でも泊るっていったって余分な部屋がねえ。(母上様)
- D. お前とはんだよお。(夫婦)

上の例ではそれぞれ、下線のように母音が長音化されているが、これは呼出とか、強調、興奮などの心理状態からでてくるものと思われる。それで本稿では、こういう理想を「長音」と名づけたい。

長音	「ア」の長音
	「ウ」の長音
	「エ」の長音
	「オ」の長音

又、次の例を参照してみることにしよう。

- A. ほかの学校に移るなん(ていう)ことは。(三年)
- B. また、名刺出してきやがったん(で)すよ。(夫婦)
- C. いつまでたっても、ごはん(に)出来ませんよ。(母上様)

上に上げた用例の中で、括弧の部分は他の音節より弱く発音され、ほぼ聞き取れなくなっている。こういう現象は、多分早口にもものを言う関係上、生まれたのであろうが、ここではこのようなものを「弱音」と命名することにしたい。

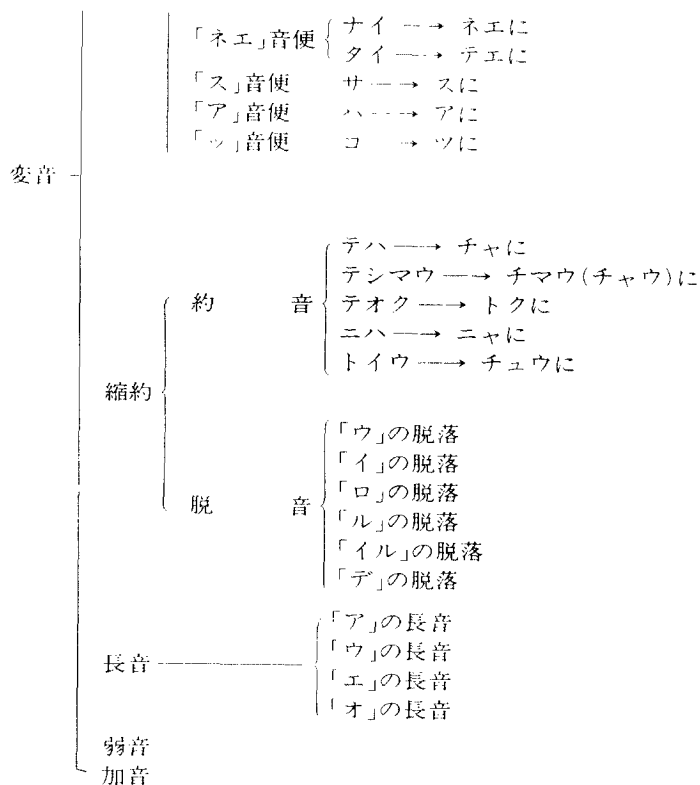
終りに、次の例を調べて見ることにしよう。

- A. あ、とってもいい先生でした。(三年)
- B. ヒャー、あら、いや。急がなくっちゃ。(夫婦)
- C. 北向きの部屋でも、猫飼えなくっても、いいの。(母上様)

上の例には、下線部のようにそれぞれ促音が入っているが、これらは多分強調の気特から出来たものではないかと考えられる。本稿ではこれを「加音」と呼ぶことにしたい。

つまり、以上のことをまとめてみると、次のようになるであろう。

談話に於ける変音現象の類型と下位分類		
音便	「ン」音便	ル → ンに
		ニ → ンに
		ノ → ンに
		ラ → ンに
		リ → ンに
	レ → ンに	
	「イ」音便	レ → イに
		ミ → イに



### 3. 変音現象の実態

「2. 変音現象の類型化と下位分類」で分けられた種々の変音について、以下順を追って述べることにする。

#### (1) 音 便

「音便」という用語の概念定義について、「広辞苑」では次のように記述してある。

「発音上の便宜から、もとの音とは違った音に変る現象<sup>11)</sup>。「咲きて」が「咲いて」、「早く」が「早う」、「飛びて」が「飛んで」、「知りて」が「知って」になる類で、もとの音と変った音とが並び行われるものにいう。」<sup>12)</sup>そして現代語では動詞の音便としては「イ音便」、「促音便」、「撥音便」があり、形容詞の場合は「ウ音便」がある訳であるが、これはあくまでも文法側面からの分け方であり、実際の談話に於いてはこれらの以外にも発音の便宜によりもとの音と変る場合がもっとあると思う。

発音の便宜という面では、日常談話に於いて、「なさる」が「なさん」になるとか、「それで」が「そんで」になるのもその事情を同じくするのではないかと思われ、これらの変音も「音便」に入れてよからうかと思うのである。それで、日常談話に於ける音便を調べて見ると次のようである。

#### 1) 「ン」音便

「ン」音便は主に談話に於ける「る、に、の、ら、り、れ」などの音が「ン」に変るのを指す。

11) 点をつけたのは筆者。

12) 新村 出、「広辞苑」, p. 375(岩波書店), 1983.

## ① ル → ンに

これは語尾が「る」で終る動詞に現れるもので、この場合、その末音の「る」が「ン」に変る傾向がある。

例) A. でも来年もう、七回忌が来んのよ。(三年)

B. あ、をれね、当分、再就職すんのやめるよ。(夫婦)

C. あ、集金があんのよ。(夫婦)

D. なんだお前、もう名前ついてんのか。ちゃっかりしてんな。(母上様)

例文Aは「来る」、Bは「する」、Cは「ある」、Dはそれぞれ「いる」の語幹「い」が脱落した形の「る」が撥音「ン」に音便化されたのである。こういう場合は「~ru」の後につく子音「n」に同化されて「~ru」が「n」に変わるようである。実際に上の例文A~Cは助詞として「n」系統の「no」や「na」がついている。ところで、このように「ru」が「n」に変る動詞を資料から抜き出すと大体次のようなものがある。

例) E. ねえ、あれ本になさんの。(三年)

F. おじさんに見てほしいっていったのはあの娘か。おい、出来んのか。(夫婦)

G. また殴んのか、お前。(夫婦)

H. どうして私の顔、じっとみつめんの。(夫婦)

I. ふざけんなよ。(友)

## ② ニ → ンに

この場合は、必ず「~になる」のような語句に於いて助詞「に」が「ン」に音便される傾向があるのを指す。

例) A. 突然好きんななんです。(三年)

B. ま、定年間近んなって部長待遇という名前をくれたわけです。(夫婦)

C. もう生きていくのがいやんなっちゃうわよ。(友)

D. へたなお経よりよっぽど供養んなる。(母上様)

上の例を見て分る通り、助詞「に」は動詞「なる」の前では「ン」に音便されると言えるが、この場合は、「~ninaru」から子音に挟まれている母音「i」が挟い関係上、脱落し、「~nnaru」になったと思われる。

## ③ ノ → ンに

これは「の」がいろいろな言葉の前で「ン」に音便化される傾向があるというのを指す。

例) A. 今井先生んところへ電話したろ、ゆうべ。(三年)

B. 車ん中、ゲロ吐きやぎってどうする気なんだよ。(夫婦)

C. 嫁入り前の娘を、もてあそんだんだから。(友)

D. そんときは、おれも誘えよ、え?(母上様)

上の例であ、「の」が「ん」にそれぞれ音便されたのであるが、この場合、大体不平、不満などの気持をこめて強く主張する終助詞「もの」や断定の助動詞「だ」の前に接続する「の」、それから「ところ」、「なか」、「とき」などの前に来る「の」にこういう現象が見られるようである。

## ④ ラ → ンに

これは語尾が「る」で終る五段動詞が否定を表わす助動詞「ない」に接続する時、主にその未然形の末音「ら」が「ン」に音便される傾向があるというのを指すのである。

例) A. 去年のスカート入んないのよ。(夫婦)

B. それを今ごろ、持ち出して、どうのこうの言われたんじゃたまんないよ。(母上様)

上の例で見られるように「ら」がそれぞれ「ン」に変わった訳であるが、この場合もやはり、「~ra」がその後につく子音「n」に同化されて生じるのではないかと思われる。

## ⑤ ル → ンに

この場合は、「り」が「ン」に音便されるのを指すが、資料の中にはあまりその用例が見つからな

い。一応、これも談話に於ける音便の一つであることにはまちがいないのでその用例を出しておきたいのである。

例) おじいちゃん、お風呂おはいなさいよ。(友)

㊦ レ → ンに

この場合もやはり資料の中には二つの用例しか出ないが、一応ここにその用例を出して置くことにする。

例) A. ピョコッと生き残ったりしたひにゃ、目もあてらないよ。(母上様)

B. だけだ、いつも母さんが乗り気じゃないんで、そんで。(三年)

2) 「イ」音便

談話に於いては主に「れ」と「み」が「イ」に音便される傾向があるように思われるが、「れ」の場合は大体「これ、それ、あれ」などが「で」や「であ」などと結合して接続詞をなしている時盛んであり、又、「み」の場合は、謝る時のあいさつ言葉の「すみません」の「み」に起こる現象を指しているのである。

㊧ レ → イに

この場合は前にも述べた通り、「これ、それ」などが接続詞の構成要素をなしている時、その「れ」が「イ」に音便される現象を指すのである。

例) A. そいじゃ、また、のちほど。(三年)

B. ああ、人をばかにしやがって、こいじゃ元も取れやしない。(友)

C. じゃ、ごちそうさま。そいじゃ行こうか。(母上様)

D. さ、そいじゃ、行ってみるか。(夫婦)

上の例はすべて「れ」が「イ」に音便されたのであるが、「あれ」の場合は接続詞の構成要素にはなれず、限度を表わす副助詞「だけ」の前に接続している時、「れ」が「イ」に音便されるらしい。

例) ふうん、まあ学校のことやりながら、あいだけ研究すんの、大変だったでしょうね。(三年)

㊨ ミ → イに

これは次の例のごとく、すべて「すみません」の「み」にだけ起こる現象であるように思われる。資料の中には他の用例が見つからなかったのである。

例) A. すいません、先生。(三年)

B. 夜にすいませんでした。(夫婦)

C. ちょっとすいません。(母上様)

つまり、この場合は、「sumimaseN」から子音「m」が脱落され、「suimaseN」になるのである。

3) 「ネエ」音便

談話に於いては否定を表わす助動詞「ない」、希望を表わす助動詞「たい」がたびたび「ネエ」、「テエ」に音便されることがある。こういうことは多分、「～nai」、「～tai」の二重母音が「e:」に縮まって「～ne:」、「～te:」たなったのではないと思われる。

㊩ ナイ → ネエに

否定の助動詞「ない」は、次の例のように「ネエ」に音便される。

例) A. いい記事書けねえぞ、こんな電話してると。(夫婦)

B. 見てねえじゃねえか。(夫婦)

C. そりゃしかたがねえじゃねえか。(友)

又、次のように否定の助動詞ではなく、形容詞の「ない」のやはり音便される傾向がある。

例) D. そのぐらいしかたがねえやね。(友)

E. 東京にゃ、ひのきのお風呂がねえからって。(夫婦)

尚、形容詞の構成要素になっている「ない」にも音便があり、つまり談話に於いてはほとんどの



「ない」が「ネエ」に音便される傾向があるということがわかるのである。

例) F. あんなもの買ってやるからいけねえんだよ。(友)

G. おじさんの格好、あんまりみっともねえんだよ。(夫婦)

㊦ タイ → テエに

希望を表わす助動詞「たい」は、稀ではあるが、時々「テエ」に音便されることがあるようで、資料の中にはたった一つしかその用例が出ていない。

例) うちの風呂は腐くてどぶみたいだ、一度でいいからひのきの風呂に入ってみてえって。(夫婦)

しかし、川端康成の「伊豆の踊子」にも又その用例があるのでここにこれを引いておく。

例) わしらが手をあわしみてたのみてえ。(伊豆の踊子)

尚、希望を表わす助動詞でなく形容詞の構成要素になっている「たい」にもこういう現象が起こるらしい。

例) ありがてえ。わしらが水戸まで送らにやならねえんだが、そうもできねえでな。(伊豆の踊子)

つまり、「たい」も「ない」の場合と同じく、ほとんどの「たい」に音便が生じるということがわかるのである。

4) 「ス」音便

「ス」音便とは、談話に於いて「なさる」「くださる」の「さ」が「ス」に変化する傾向があるというのを指す。

例) A. ああ、読んでてくだすったんですか。(三年)

B. 毎日、そんなことなすっちゃこまりますよ。(資料外)<sup>13)</sup>

音節「さ」が「ス」に音便されるのは談話に於いて「くださる」「なさる」に限られるようである。

5) 「ア」音便

これは主に係助詞「は」が代名詞に接続して主語文節にたつ時、その半母音「W」が脱落する傾向を指すのである。

例) A. ほかあ弟の彼女を横取りするようなことはできません。(三年)

B. こいつあちょっと深刻なんでね。(夫婦)

C. そらあそうだなあ。(夫婦)

但し、この場合例A、Cに見られるように、半母音「W」の脱落に伴い<sup>14)</sup>代名詞に於いては母音の移動があるようになるのである。即ち、それぞれ「ほか」は「ほか」に、「それ」は「そら」になるのであるが、これはあくまでも半母音「W」の脱落した形の「a」に同化されたためであろう。さて、例文Cの場合、長音でなく短音で発音される関係上、「あ」が脱落してしまうこともある。

例) うん、こらどうかな。(三年)

6) 「ッ」音便

この場合は不明な所をさす「どこ」が不確かな気持ちを表わす助詞「か」に接続する時にその末音「こ」が促音「ッ」に音便されるのであるが、但しこれはあくまでも助詞「か」に接続する時に限られる現象であるらしい。

例) A. それから、おじいさんはね、どっかへ。(友)

B. やろうよ、ね。どうしたんだよ。どっか悪いの。(友)

このような現象は、「dokoka」に於いてまん中の母音「o」が弱く発音されながら後には脱落し

13) 「資料外」とは、本稿に於ける資料の中には適切な用例が見当たらないので、筆者がつくった用例をいう。

14) 半母音「W」はもともとその音質が弱い関係上、脱落につながるようである。次の例もそういう関係から生じたのであろう。わたし(watashi)→あたし(atashi)

これについては、水谷修・水谷信子、「AVRAL COMPREHENSION PRACTICE IN JAPANESE」、p. 71. (The TAPAN TIMES), 1979を参照すること。

てしまい「dokka」になっと思われる。

尚、「ッ」音便には「た」が「ッ」に音便されるものもある。

例) 風呂はいいよ。体も心もあつたまる。(夫婦)

この場合は、資料の中には「あつたまる」があるばかりである。<sup>15)</sup>

## (2) 縮 約

本稿で「縮約」というのは、談話に於いてももとの音節が縮むか、脱落するかして音節の数が少なくなるのを指すのである。

例) A. 今井先生、僕のほうが二日勝っちゃった。(三年)

B. それ焼いて、ね、一杯飲んでて。

上の例Aはもともとは、「勝ってしまった」となるはずであるが、「～てしまう」が「～チャウ」に縮んでしまったし、又、Bは、ももとの「飲んでいて」から「い」が脱落したのである。

段々複雑化、多様化し、いわゆる情報化社会とまで言われている現代の日常の言語生活に於いては、できるだけ少ない発言をもってより多くの情報を表出できるのが理想的、鮮明的であると言えるだろう。こういう脈絡から見ると、実際の発音に於いてその音節の数が少なくなるのは当然であろう。

本稿では、例文Aのような音節の縮みを「約音」と称し、又、例文Bのような音節の脱落を「脱音」と称することにしたいが、これはあくまでも便宜上の試みにほかならない。

### 1) 約 音

これは実際の発音に於いて発音の便宜上、その音節が縮むのであり、あまり丁寧な感じはしないが、それなりに普通の会話ではよく使われているのである。その主な例を上げると次のようである。

例) A. あきらめなくちゃいけない。(三年)

B. 失業保険の金で、おれ、おごってもらっちゃったんですか。(夫婦)

C. え、よく信つときますですよ。(友)

D. ピョコッと生き残つたりしたひにゃ、目もあてらんないよ。(母上様)

E. だから、あなたがすぐしなきゃいけないことは。(三年)

F. あんたに恥かしくて合わせる顔がないちゅうんで。(友)

上の例を見てわかる通り、Aは「～ては」が「チャ」に、Bは「～てしまう」が「～チャウ」に、Cは「～ておく」が「～トク」に、Dは「～には」が「～ニャ」に、それからEは「～なければ」が「～ナキヤ」に、Fは「～という」が「～チュウ」にそれぞれ約音化されたのである。

以下、順を追って約音について述べることにする。

① ～ては → チャに

談話に於いては、「行つては」、「しては」、「書いては」などが「行っちゃ」、「しちゃ」、「書いちゃ」に変る時がよくある。やはり二音節を一音節に縮めるのは発音に於いて便利であり、又、省力の効果もあるだろう。その主な例を上げる。

例) A. 広次達あんたが仕事だから、じゃましちゃ悪いって、あいさつしないで帰ったわよ。(三年)

B. また買わなくちゃ。(夫婦)

C. ああ、それにあんた、喪服の手配もしとかなくちゃ。(友)

D. そんな、名前も顔も覚えちゃいせんよ。(母上様)

例) A. ウフン、あんまり忠実な読者じゃないけど。(三年)

B. ありゃいい。風呂へ入ると、プーンとひのきの香りがしてなあ。(夫婦)

② ～てしまう → ～チマウ、～チャウに

15) この場合もその事情は前の「dokka」と同であろう。つまり、「atatamaru」から 下線の母音「a」が脱落したのである。

残念な気持ちを表はす「～てしまう」も談話では、よく「～チマウ」に変わるようである。

- 例) A. ちよっと切らしちままして。(夫婦)  
 B. あのお、孫はな、きょうもまた、来られなくなちまったんだよ。(友)  
 C. ゆうべ、お客さんぶんちまったんですよ。(夫婦)  
 「～てしまう」は又、上の例の「～チマウ」の他に「～チャウ」に縮むこともとくある。
- 例) A. いいか、礼子さん、上等のビフテキと、うーんワインを注文しちやうからな。(三年)  
 B. ああ、小倉さんか。尊敬しちやうな。(夫婦)  
 C. あら、やだ。もってちやうのかしら。(友)  
 D. 迷子になちやうと、かわいそうだからね。(母上様)
- 「～チマウ」と「～チャウ」の間に意味上の差はあまりないようであるが、実際の使い方としては「～チマウ」より「～チャウ」の方がもっと盛んであるように思われる。又、当然のことながら、「～チマウ」、「～チャウ」の前に語尾がぬ、ぶ、むで終る五段動詞が接する時は、それぞれ「～ジマウ」、「～ジャウ」に変わる。
- 例) A. そしたら千代ちゃんも僕の前に座り込んじゃって。(夫婦)  
 B. だからって、持ち込んじやえば、まさかだめとは信わないだろうって。(母上様)

㊦ ～ておく → ～トクに

談話に於いては、たびたび「～ておく」が縮んで「～トク」になることがある。即ち、「～te'oku」から母音の連続を避ける傾向により<sup>16)</sup>母音「e」が脱落して「～toku」になるのである。

- 例) A. やっぱりやめときましょうね。(夫婦)  
 B. 睦子さん、あんた、今のうちに美容院に行といたほうがよきはなあい。(友)  
 C. あんたね、荷物が落着くまでさ、これ、ゆわえといたらいいわよ。(母上様)  
 D. ん——、義理に買って、ん——、押し入れのすみかなんかほっとかれたらちっともうれしくないよ。(三年)

又、これと同じ系統のものに「～ておる」が「～トル」、即ち「～te'oru」からやはり母音「e」が脱落して「～toru」になることもまれではない。

- 例) A. ただ先日、追突事故をやっとるんです。(夫婦)  
 B. あ前が習っとる英語ぐらい読めんだから。(友)

㊧ ～には → ニャに

格助詞「に」に係助詞「は」が結合した「には」は、談話でときどき「ニャ」に縮んでしまうことがある。つまり、「～niwa」から半母音「W」が脱落し<sup>17)</sup>、「～nia」になるのである。

- 例) A. いやあ、正直言って、守備範囲の広さにや驚きましたよ。(三年)  
 B. 東京にや、ひのきのお風呂がねえからって。(夫婦)  
 C. ピョコツと生き残ったりしたひにや、目もあてらんないよ。(母上様)
- ところで、この場合、助詞に限らず係助詞「は」のまえに母音「i」が来るとほとんど「iwa」が「ia」に変わるらしい。

次の例を見るとそれのはっきりわかる。

- 例) A. 本だって売れないよりや売れたほうがいいんだ。(三年)  
 B. わしや、あのばあさん、気色が悪いんだよ。(友)  
 C. 勉強もしないで、何を考えてんだかさっぱりわかりやしない。(友)
- 尚、この場合、談話では「ia」の母音「a」が長く発音され長音になることもある。
- 例) こんなことで、死にやあしないからさ。(友)

㊨ ～なければ → ～ナキヤに

16) 国語学会、「国語学大辞典」、p. 401(東京堂出版)、1981。

17) 半母音「W」は、摩擦があるという点では子音的であるが、その摩擦が弱いという点では母音的であって、たびたび脱落される傾向があるようである。前掲書 p. 805 参照。

動詞の未然形に接続して否定を表わす助動詞「ない」の仮定形「～なければ」は、談話に於いては普通「～ナキヤ」に縮んでしまう。

例) A. だから、あなたがすぐしなきやいけないことは、弟さんに真実を話すことよ。(三年)

B. いくら話をしても分からない時は、欧らなきやいけない時もあるな。(夫婦)

C. きょうでなきやだめだってとこがさ。(友)

例文Cの場合を見ても分かる通り、「～なければ」が「～ナキヤ」に縮むのは助動詞の「ない」に限らず、形容詞の「ない」にもあてはまるのである。

処で、「-eba」が「-ia」に変わるのは、助動詞「ない」、形容詞「ない」ばかりでなく動詞の仮定法にもよく起こる現象である。次の例を見てほしい。

例) A. よく大学の先生が雑誌や新聞に書くけど、僕から言わせりや、ええかっこしいだ。(夫婦)

B. あんたみたいなガールフレンドができりや、こいつも少しは変わるだろう。(友)

C. いや、いや、吹きや飛ぶような新居だもの。(母上様)

D. じゃ、壁のペンきが乾くまで預りやいいのね。(母上様)

### ㊦ その他の約音

談話の約音に於いては、以上の他に次のようなものがある。「このあいだ」は「コナイダ」に縮んでしまうが、これは「kono'aída」から二番目の母音「o」が脱落したのである。

例) A. さあ、今日はこないだの敵討ち。(三年)

B. こないだあんた結婚するって言ったでしょ。(三年)

それから、語句の引用・伝達を表わす「～という」の場合は、談話では「～チュウ」に縮むことがあるが、これは主に老人語に於いての現象ではないかと思われる。

例) A. あんたに恥かしくて合わせる顔がないちゅうんで。(友)

B. でも、あつそう、あの、ポールが歌う「いとしいヘレン」ちゅうの、ね、あれいいですね。(友)

C. その生に未練がないちゅうところが、一番いい。(友)

又、稀ではあるが、「～という」が「～テエ」に変わる時もないではない。

例) 各前なんててえの。(夫婦)

終りに、「これは」、「それは」、「はれは」などは、それぞれ「コリヤ」、「ソリヤ」に縮んでしまう。

例) A. そりやまあ、ひとり身だんなからじゃないですか。(三年)

B. ありやいい。風呂へ入ると、プーンとひのきの香りがしてなあ。(夫婦)

### 2) 脱 音

「脱音」とは、前にも述べた通り表現をより短かくするために一部の音節を省くことを指すのであるが、実際の談話でどのような音節が脱落するかといえば、大体次のようなものがある。

例) A. 今井先生んところへ電話したろφ、ゆうべ。(三年)

B. それ焼いて、ね、一杯飲んでφで。(夫婦)

C. あ、集金があんよ、きょうでなきやだめだめだってとこφがさ。(友)

D. うち買うと、男は白髪かふえφんだってさ。(母上様)

E. お前のことを信ってφんじゃないよ。(夫婦)

上の例では、例文Aは推量を表わす助動詞「う」が脱落したし、Bは補助動詞「いる」の語幹「い」が、それからCは場所を表わす名詞「ところ」の末音「ろ」が脱落しているのである。又、例文Dは動詞「ふえる」の「る」が脱落したし、Eは補助動詞「いる」が脱落している。

本稿で「脱音」というのは、以上のようなものを指しているし、談話に於ける「脱音」は大体これらに限られているようである。では、これから順を追って述べて行くことにする。

### ㊦ 「ウ」の脱落

「ウ」の脱落は、大体次の三つの場合に分けられる。

- ① 推量・勧誘の助動詞「ウ」の脱落
- ② 副詞「ソウ」、「ドウ」に於ける「ウ」の脱落
- ③ 名詞「カッコウ(格好)」に於ける「ウ」の脱落

以上の三つの場合の中でやはり「ウ」の脱落が一番盛んであるのは言うまでもなく、助動詞「ウ」である。

- 例) A. でも、それは、あなたの判断でしょφ。(三年)  
 B. あんたのほうから行きたいって言ったんでしょφ。(友)  
 C. 昨日、今日のひよこ違うだろφ。(夫婦)  
 D. だって自分でゆずったんだろφ。(母上様)

上の例は、すべて文末の助動詞「ウ」が脱落したのであるが、この場合丁寧な表現(例文A,B)と、普通の表現(例文C,D)などの区別はなく、どの表現にもこういう現象が起こるようである。それから、このような助動詞「ウ」の脱落はただの推量表現よりは、文末のイントネーションを上げることにより相手に対する質問、確認の気持ちを表わす場合によく現れるようである。実際、資料の中に於ける「ウ」の脱落の用例を調べて見るとほとんどこのような文ばかりであることがわかる。

又、勧誘を表わす助動詞「ウ」が脱落する場合もないではない。

- 例) ちょっと暮を打ちましょφ、ね。(三年)  
 資料の中には上の例一つあるばかりである。  
 それから二番目に、「ソウ」、「ドウ」などの副詞に於ける「ウ」の脱落も早口の談話にはよく現れるのである。

- 例) A. そφしたら千代ちゃんも僕の前に座り込んじゃって。(夫婦)  
 B. どφした。あの子とは、うまくいってるか。(友)  
 終りに、名詞に於ける語構成要素である「ウ」が脱落するのは、「カッコウ(格好)」の場合だけが資料から見られるのである。

- 例) A. かつこφ悪かったらあたし、一緒に行ってあげるわよ。(夫婦)  
 B. ものにするまでは、かつこφもへちまもない。(夫婦)

#### ④ 「イ」の脱落

談話に於ける脱音の中で一番盛んなのがこの「イ」であり、大体、次のような場合がある。

- 例) A. ええ、でも間違っφないと思います。(三年)  
 B. これ、持ってφってください。(夫婦)  
 C. あんたはあっち行ってφらっしゃい。(友)  
 D. あら、φやだ。もってっちゃうのかしら。(友)

例文Aは、補助動詞「いる」の語幹「い」が脱落したのであり、Bは動詞「いく」の語幹「い」が、Cは「いらっしゃる」の初音「い」が、それからDは形容動詞「いやだ」の「い」がそれぞれ脱落したのである。談話での「イ」の脱落は、大体このぐらいであるが、これらの中で一番盛んであるのは、やはり補助動詞「いる」の場合であり、これを除く他の場合はあまり多くはないようである。

処で、どうしてこのような「イ」の脱落が起こるかと言えば、やはりこれあくまでも「イ」の音色が弱いことに由来するのであないかと思われる。実際の発音を聞いて見ても「イ」の発音をはっきりと感じることはなかなか難しいようである。次の例文Aには「イ」が入っているし、A'には「イ」が脱落してあるが、早口に発音する際、「イ」の存在を感じとることは、例文A、A'が共に難しい。

- 例) A. ああ、まったく菓子折まで持っていったんだよ。  
 A'. ああ、まったく菓子折まで持ってφったんだよ。

補助動詞「いる」に於ける「イ」の脱落した例文としては次のようなものが上げられる。

- 例) A. 3年前にはなんとも思っφなかった子なのに。(三年)  
 B. あの、あたし、高等女学校出φるんですけど。(夫婦)  
 C. なんだよ。おやじはあっち行ってφろよ。(友)

D. あたし。聞いて $\phi$ ませんけど。(母上様)

それから、二番目に「イ」の脱落が多いのは動詞「いく」の語幹「い」の場合である。

例) A. ま、いいから持って $\phi$ け。(夫婦)

B. これ、持って $\phi$ ってください。(夫婦)

C. ああ、今、出て $\phi$ かない方がいいよ。(友)

又、「いらっしやる」が補助動詞に使われる時もやはり初めの音「イ」が脱落する傾向がある。

例) A. 気晴らしに行って $\phi$ らしたら。(友)

B. あんたはわっち行って $\phi$ らっしゃい。(友)

C. タマちゃん、タマちゃん、おとなしくして $\phi$ らっしゃいよ。(母上様)

終りに、形容動詞「いやだ」、又は、その転成である感動詞「いや」にもこういう現象が現れるようである。<sup>18)</sup>

例) A. なんだよ……どうしたんだよ…… $\phi$ やだなあ。(友)

B. あら、 $\phi$ やだ。もってっちゃうのかしら。(友)

C.  $\phi$ やあねえ。(母上様)

### ㊸ 「ロ」の脱落

これは談話でひたすら場所・場合などを表わす名詞「ところ」にだけ見られるもので、その場合、「ところ」の末音「ろ」が頻繁に脱落し、「トコ」になるのである。<sup>19)</sup>

例) A. 雪が降ると、なかなかいりと $\phi$ なんですよ。(三年)

B. あ、集金があんのよ、きょうでなきやだめだってとこ $\phi$ がさ。(友)

C. ま、そんなとこ $\phi$ だね。(友)

D. いまにね、大きなとこ $\phi$ に、出してもらえるよ。(母上様)

### ㊹ 「ル」の脱落

これは「る」で終る動詞の語尾「る」が脱落することを指すのである。

例) A. おい、なぜとめ $\phi$ んだよ。(友)

B. うち買うと、男は白髪がふえ $\phi$ んだってさ。(母上様)

但し、この場合上の例から分かる通り、「る」で終る動詞の後には、「だ」、「です」などを伴って断定・説明の気持ちを表わす準体助詞「の」と同じ働きをする助詞「ん」が来るのが常であるように思われる。

### ㊺ 「イル」の脱落

この場合は、「いる」が「～ている」の形で補助動詞の役割をする時、談話に於いてはたびたびその「いる」が脱落してしまう傾向を指す。

例) A. 原島君は、どこへ勤めて $\phi$ んだ。(夫婦)

B. 勉強もしないで、何を考えて $\phi$ んだかさっぱりわかりやしない。(友)

C. なにやって $\phi$ んだ、いい年して。全く。(母上様)

処で、どうしてこのように「いる」が脱落してしまうかを考えて見ろに、これは多分 2) ㊸で述べたことのある「ん」の脱落が行なわれた後、それに触発され残りの「る」も共に脱落したのではないかと思われる。つまり、「い」と「る」の脱落が次の過程をへて同時に行なわれたのであろう。

A. 何年、新聞記者やっているんだ。

↓

A'. 何年、新聞記者やって $\phi$ るんだ。

↓

A". 何年、新聞記者やって $\phi\phi$ んだ。

18) こういうことは主に若者の発話によく現れるようである。

19) 「とこ」は「ところ」の俗語と言われているが、改まった場合の「ところ」に比べて一応「ろ」が脱落するものだから、ここに入れたのである。

尚、この場合も当然のことながら前の「る」の脱落と同じくその後には断定説明を表わす「～んだ」のような語句が必ず来ることになっている。次の例文もすべて「いる」の脱落した後は「～んだ」が来ている。

- 例) A. ああ、若い連中、来てんだ。(夫婦)  
 B. 年寄りらしくしろと言ってんだよ。(友)  
 C. なに言ってんだよ。もう。(母上様)

### (3) 長 音

「長音」とは、談話に於いて主に話手の詠嘆、感情の高ぶり、強調、驚き、呼びかけなどの心的要因により発音を長くするのを指すのであるが、この場合は母音が一拍以上長く発音されるのである。

- 例) A. お前とはなんだよお。(夫婦)  
 B. 手紙だって誤字だらけでえ。(友)  
 C. しかし、遺書なんて書くもんじゃないなあ。(母上様)  
 D. 尚齒会というのだけはすこうし違っていた。(三年)

上の例A～Dは、それぞれの母音が長音に発音されたのであるが、これらの長音には、話手の感情がたっぷり込められているように考えられる。

#### ㊦ 「ア」の長音

これは五十音図に於いて「ア」段に属する音節が長く発音される場合を指す。

- 例) 器量だって、気持ちだってあなたのほうがずうっと上。(母上様)

談話の長音に於いて「イ」の長音は、資料の中からは見つからないし、「ウ」の長音もその用例が少なくて上の例一つがあるだけである。尚、この場合もその長音には話手の感情が入っていて、例文には強調の気持が感じられる。

#### ㊧ 「エ」の長音

これは五十音図に於いて「エ」段に属する音節が長く発音される場合を指す。

- 例) A. あの子はちょっと度が過ぎてますねえ。(三年)  
 B. でも泊まっていったって余分な部屋がねえ。(母上様)  
 C. 返して、返してよう。返してえ。(友)

上の例にもそれぞれの長音には話手の感情が入っていると言える。

#### ㊨ 「オ」の長音

これは五十音図に於いて「オ」段に属する音節が長音に発音される場合を指す。

- 例) A. 尚齒会というのだけはすこうし違っていた。(三年)  
 B. よその社が抜くのはいい、うちじゃ書けないんだよお。(夫婦)  
 C. ようく食べるでしょ、父さん。(友)

例文A、Cの場合は強調の気持、それから例文Bには感情の高ぶりが感じられるようである。

### (4) 弱 音

「弱音」とは談話に於いて語や語句の一部が他の言葉より弱く発音され相手に弱く聞こえるか、ほぼ聞こえない談話上の変音現象を指す。その場合、語や語句の一部が弱く発音される背景としては大体、元々の音の性質が弱いとか、同じ母音が連なっているとか、又は、同じ文中に於ける情報の重要度の差などをあげることができだろうが、これらに劣らず重要なものとしては話手のその時々々の心的状態や物理的環境などがあるので、とにかく一律的なルールみたいなものはとりにくい。まず、元々の音の性質が弱いので弱音になってしまうと思われるのは次のようなものがある。

- 例) A. お父さん、なぜあんなこと(を)したんです。(友)

- B. いつまでたっても、ごはん(に)できませんよ。(母上様)  
 C. おじさんに見てほしいって(い)ったのはあの娘か。(夫婦)  
 D. 雪が降ると、なかなかいいとこなん(で)すよ。(三年)

上の例の括弧の音節は、談話で早口に発音される時は弱音になってしまい、実際聞き取れにくくなるのである。このような弱音の過程が進むと脱音に繋がるようになり、例文Aの目的格助詞「を」、Cの「い」、Dの「で」などは脱落する場合がいくらかでもある。

実際、「脱音」の項で観察したように、  
 ○どこへ行って $\phi$ たの。(「イ」の脱落)

○そんなん $\phi$ すよ。(「テ」の脱落)

などの表現はあまりめずらしくなく、又、

○別に。今、本 $\phi$ 読んでるよ。(「ヲ」の脱落)

のような助詞の省略は談話で頻りに現れるのである。

それから、次に連母音により弱音になると思われる場合の例としてこういうものがあげられる。

例) A. (い)や、それは困るんです。(夫婦)

B. その年でね、十七、八の娘と文通しようっての、だい(い)ちおかしいんだよ。(友)

例文Aのようなものは、2) 脱音(5)「イ」の脱落で見たように「い」が完全になくなって次の例のようになることもある。

例) あら、 $\phi$ やだ。もってっちゃうのかしら。(友)

又、一文に於ける情報の重要度により弱音になってしまうと思われるのは次のようなものがある。

例) A. 年をとると臭くなって(いうからな)。(夫婦)

B. たらむこうから返事がきた(んだ)。(友)

例文Aは、夫が妻に対して臭くなったひのきの風呂おけについて言っているのであるが、この文で話手の伝達しようとする情報はあくまでも、「年をとると臭くなる」ぐらいだろう。つまり括弧の「いうからな」は情報の重要度が低いと言わなければならない。

又、例文Bもその事情は、Aと同じであると言える。結局、話手は場合により自分の伝えたい内容の骨子を表わすと、その後の語句は急に弱く発音することが談話にはよくあるらしい。こういう語句の弱音化は主に文末の語句によく現れるようであるが、情報の重要度によっては文中の語句であっても弱音化することができる。

例) じゃ、ひのきの(お風呂に)すれば……………(夫婦)

上の例文は、妻が夫に対して風呂を新しくしようという発言であるが、この文に於いて一番重要度の高いのはやはり「ひのき」であり、「お風呂」は重要度が低い。もし「ひのき」を弱音化したらどうなるだろうか。

例) じゃ、(ひのきの)お風呂にすれば……………

風呂にはポリバケツみたいなものもあるが、ひたすらひのきの風呂がほしいと言っているので、こういうインフォメーションの伝達として上の例文はすわりが悪いようである。

### 5) 加 音

本稿に於ける「加音」とは、話手が一部の語句に促音「ッ」や撥音「ン」などを加えて語句を強調するとか、又は強調でなくとも普段の言語習慣からそうすることを指すのである。

本稿ではそれらの例を上げるにとどまることにする。

例) A. いえ、はじめたばッかりですから。(三年)

B. いッくら説明しても信用してくれないんです。(夫婦)

C. いッつもそんなだから。(友)

D. その方がいいかもかもしれませんよ。ごたごたがなッて。(母上様)

E. おじさんの格好、あンまりみっともねえんでよ。(夫婦)

F. あの、場所と時間はきンじょうとおンなじてよろしいですか。(友)

G. これからはね、なンにもないほうがいいんだよ。(友)



### III. 結 論

いままで談話に於ける種々の変音現象についてその例を上げながら考察してきたが、やはり日本語はむだのない、簡便性、省略性の優れている言語であると言える。伝達の内容に於いて、重要度の低い語句はすべて省略してしまい、果てにはそれらの重要度の高い語句であってもその一部をできるだけ短かく縮めてしまうのである。これは物造りに於いていつも縮み指向をする日本人の根本的な考え方から由来すると言えるだろう。

談話の変音は、その表わし方が大体くだけた形であり、あまり丁寧な感じはしないが、日常の言語生活に於いてはこのような表現が頻りに使われているのである。こういう変音現象は、日本語に限らずほぼどの言語にもあり、その事情は同じであろうが、日本語ほど甚だしいのはそれほど多くはないだろうし、それは今まで考察してきた通りである。

以上の考察結果をまとめると次のようである。

① 談話では、語尾が「る」で終る動詞の末音「る」、「～になる」という語句の助詞「に」、連体格助詞「の」や準体助詞「の」、それから連体詞「その」などの末音「の」、「る」で終る五段動詞の未然形の末音の「ら」などが「ン」に音便されることがよくある。

② 談話では、「これ、それ」などが接続詞の構成要素になっている時は「れ」が「イ」に、又、「すみません」の「み」が「イ」に音便されることがある。

③ 談話では、否定を表わす助動詞「ない」、形容詞「ない」は「オエ」に音便される一方、又、希望を表わす助動詞「たい」もやはり「テエ」に音便されることがある。

④ 談話では、「くださる」、「なさる」の「さ」が「ス」に音便されることがある。

⑤ 談話では、係助詞「は」が「ア」に音便されると共にその前の代名詞の末音も「あ」段に同化されることがある。

⑥ 談話では、「どこか」の「こ」が促音「ッ」に、又、「あたたまる」の「た」が促音「ッ」に音便されることがある。

⑦ 談話では、「～とは」が「チャ」に、「～てしまう」が「チマウ、チャウ」に、それから「～ておく」が「トク」に縮むことがよくある。又、「～という」が「チュウ」に縮むこともある。

⑧ 談話では、推量の助動詞「う」や補助動詞「～ている」の「い」、「ところ」の「ろ」、それから「る」で終る動詞の末音「る」や補助動詞「～ている」の「いる」が脱落してしまうことがよくある。

⑨ 談話では、話手の詠嘆、感情の高ぶり、強調、驚き、呼びかけなどの心的要因により、「あ」、「う」、「え」、「お」段の語が長く発音されることがある。

⑩ 談話では、早口に発音される時はいろいろの語句がほぼ聞こえないほど弱くなることがある。

⑪ 談話では、語句を強調するとか、又は普段の言語習慣から一部の語句に促音「ッ」や撥音「ン」などが加わることがある。

### 参 考 文 献

- 大石初太郎外、「話し言葉」、文化庁、1981。
- 松村 明、「日本文法大辞典」、明治書院、1982。
- 森島久雄、「話し言葉の世界」、教育出版、1979。
- 水谷 修、「話し言葉の表現」、筑摩書房、1983。
- 国広哲彌外、「日本語」、岩波書店、1977。
- 秋永一枝外、「言語行動と日本語教育」、凡人社、1985。
- 土岐 哲外、「日本語教育28号」、1975。
- 大坪一夫外、「日本語教育事典」、大修館書店、1982。

- 新村出, 「広辞苑」, 岩波書店, 1983.
- 水谷 修, 水谷信子, 「AURAL COMPREHENSION PRACTICE IN JAPANESE」, The JAPAN TIMES, 1979.
- 国語学会, 「国語学大辞典」, 東京堂出版, 1981.